

# 教育委員会会議録

令和8年（2026年）4月定例教育委員会会議

開 会 日	令和8年（2026年）4月23日（木）	
開 会 時 間	午後2時00分 ～午後5時53分	
開 会 場 所	S P r i n g 熊本花畑町 7階 D会議室 ※一部オンライン開催 オンラインでの出席者については各執務室	
出 席 者	委 員 会	遠藤洋路 教育長 西山忠男 委員 苜野一徳 委員 澤栄美 委員 村田槇 委員 清田晃子 委員
	事 務 局	吉田潔 教育次長 梶原勢矢 教育次長 中川浩二 教育総務部長 楳木敏之 学校教育部長 他
提 出 議 案	議第25号 熊本市特別支援学校等教科用図書選定委員会委員の委嘱等について 議第26号 歳入歳出予算のうち教育に関する事務に係る部分に対する意見について	
報 告	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 令和8年第1回定例市議会報告について</li> <li>(2) 令和7年度熊本市学力調査の結果について</li> <li>(3) 熊本市立学校教員採用選考試験の実施について</li> <li>(4) 令和7年度児童生徒・教員のタブレット端末の活用状況に関する実態調査の結果報告について</li> </ul>	
自 由 討 議	次期学習指導要領改訂に向けてのAI教育のあり方について	
署 名	村 田 槇	
	清 田 晃 子	
会議録作成者	教育政策課 有働 真帆	

<p>〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和8年4月定例教育委員会会議を開会いたします。</p>
<p>〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>本日は、私のほか5人(3人以上で成立)の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。 会議規則第14条第2項の規定に基づき、会議録署名人の指名を行います。会議録署名人は、村田委員と清田委員とします。よろしくお願いたします。</p>
<p>〔公開の審議〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、本日の議事のうち、議第25号 熊本市特別支援学校等教科用図書選定委員会委員の委嘱等については、委員の氏名を公開することにより、率直な意見の交換又は意思決定の中立性が不当に損なわれるおそれがあること、自由討議 次期学習指導要領改訂に向けてのAI教育のあり方については、その内容に、講師である今度珠美(いまだ たまみ)氏が過去に実施した事業の具体的な事例の詳細を含んでおり、不特定多数を対象に公開することは権利上の支障があることから、会議規則第13条第4号「その他の案件」の非公開事由に該当すること、議第26号 歳入歳出予算のうち教育に関する事務に係る部分に対する意見については、会議規則第13条第2号「教育予算その他議会の議決を経るべき議案についての意見の申出に関する案件」に該当することから非公開の審議が適当と思います。  議第25号、議第26号及び自由討議につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。  (全員挙手)  全員賛成により、議第25号、議第26号及び自由討議は、非公開とします。</p>
<p>日程第1 前回来議録承認 遠藤洋路 教育長</p>	<p>それでは、「日程第1 前回来議録承認の件」に入ります。 3月26日開催の令和8年3月定例教育委員会会議録を各</p>

委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありませんか。

(異議なしの声)

異議なしと認めます。前回会議録は、承認することに決定いたします。

**日程第2 事務局報告の件**

・(1) 事業・行事等報告について

遠藤洋路 教育長

それでは、進行の都合により「日程第5 自由討議」を先に行い、次に公開案件の「日程第4 報告」を行った後、非公開案件の「日程第3 議事」の審議を行います。よろしくお願いいたします。

【非公開の審議】

**日程第5 自由討議**

・テーマ「次期学習指導要領改訂に向けてのAI教育のあり方について」

《今度珠美 一般社団法人メディア教育研究室代表理事、国際大学GLOCOM客員研究員、文科省中央教育審議会初等教育部会 情報・技術WG委員 講話》

〔公開の審議〕

**日程第4 報告**

・報告(1) 令和8年第1回定例市議会報告について

《資料事前配布》

西山忠男 委員

3ページだったと思いますが、外国人への日本語教育についてのご質問がありました。私たちもそれについてはいろいろ、黒髪小学校などを訪問して勉強させていただいたところですが、その頃に比べて、外国人の生徒さんはどれくらい増えているのか、また今後、どれくらい増える見通しと考えておられるのか、ちょっと教えていただけないでしょうか。

寺前研太郎 指導課長

数年前に比べて、確実に人数は増えております。すみません、具体的な数が今、出てきませんが、令和6年が99、そして昨年度は少し減ったと思うんですが、それでも80以上はいるという状況で、段階的に増えてきているという状況は言えます。

西山忠男 委員

それで、前回、黒髪小学校を訪れたときも、コーディネーターの人が拠点校に在籍しながら、あっちこっちの小学校に指導に行くというようなことがあって、かなり大変そうだなという率直な印象を受けたんですよね。ですから、今後、さらに外国人が増えるようであれば、そういう体制ももう少し整備していかなくちゃいけないと思うんですね。

TSMCの進出があってから、台湾の方も増えているかもしれないですし、そのあたりの将来的な見通しについてお伺いしたいんですが、いかがでしょうか。

寺前研太郎 指導課長

ありがとうございます。

TSMCの話が今、出てきましたけど、第2工場の建設等もあって、今、市全体でプロジェクトチームをつくって今、検討している途中ですけど、確かに第2工場ができて、急激に、例えば30人とか50人とか増える状況になると、今の拠点校方式だと対応ができないということも想定されますので、例えば他県で行っている1か所に集めて、プレスクールのようなもの、そういうのも少し視野に入れたいかというの思っております。

西山忠男 委員

分かりました。

遠藤洋路 教育長

ほかにいかがでしょうか。  
どうぞ、西山委員。

西山忠男 委員

じゃ、皆さんがお考えになっている間にもう一つ質問させていただきます。

教員人材確保の問題が15ページだったですかね、ありまして、これまでやってきた教育活動アシスタント事業というのがありますが、参加者のうち、本市の教員採用試験を志願したのは、昨年度40%、本年度28%にとどまり、教員採用への効果は限定的であったため、事業を見直すことにしたと書いて

	<p>あるんですけど、40%、28%あれば、結構いいんじゃないかと私は思っていて、これやめる必要はなくて、まだ継続したほうがいいんじゃないかと思うんですけど、その辺のご判断はいかがなんでしょうか。</p>
萩本広智 教職員課長	<p>そうですね。むしろ、学生よりも一般のペーパーティーチャーを対象にした事業に組み替えたほうが、より効果的ではないかと考えておりました。今年度から事業を見直しまして、ペーパーティーチャー・アシスタント事業というものに変更させていただいたところです。現在、免許を持っているものの、ランク等がありまして、教壇に立つことに関して不安をお持ちの方に対して、まずは学校現場に慣れていただいて、行く行くは常勤あるいは非常勤の講師という形で採用につなげたいということで考えておりました。こちらのペーパーティーチャー・アシスタント事業のほうに今回、振り替えさせていただいたところでございます。</p>
西山忠男 委員	<p>いや、私の質問の意図は、教育活動アシスタント事業であれば、若い人が採れるんですよ。ペーパーティーチャーですと、これまで免許を持って長い間、教員として勤務していないという人ですから、年齢層が変わってくるなというので、アシスタント事業で40%、28%程度の志望者があるんだったら、それをやめる必要はないんじゃないかなと思ったんですけど、それをなぜやめたのかということなんですけど。</p>
萩本広智 教職員課長	<p>この分については、パーセントが減っているということで、なかなか効果が見られないという判断をいたしまして、また別の手法を考えてみようということで、今回のまた新しい事業に取り組んだというところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>西山委員、いかがでしょうか。</p>
西山忠男 委員	<p>いや、まあ、ちょっとあまり釈然としないんですけど、両方やってもいいんじゃないかなという気はしますけど、お金の問題があるんでしょうね、多分。だからペーパーティーチャー・アシスタントのほうにしたら520万円減らせるということもあったんだろうと思いますけど、もし本当に教員の人材確保が焦眉の急であるなら、少し予算をつけてでも両方やったほうが</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>いいんじゃないかなという印象は持ちました。意見です。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>ほかの委員はいかがですか。</p> <p>澤委員、どうぞ。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>すみません。事前に印をつけていたつもりが全部消えているので今、必死で探していたんですけど、私が知らなかったシステムといいますか、立場について教えていただきたいんです。</p> <p>1つを見つけました。11ページのスクールサポートボランティアというのが出てきていましたけど、このスクールサポートボランティアというのはどういった立場の人で、どんなことをしているかというのを教えていただけたらと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>これはオンラインですか。</p>
<p>宮本義久 地域教育推進課長</p>	<p>スクールサポートボランティアというのは、地域の方々のいろんなボランティア活動をリードしていただくような中心的な役割を担っていただくということを期待しております。</p> <p>昨年度におきましては、コミュニティースクールで地域と学校をつないでいただく地域のコーディネーターの養成を目指して研修を行っているところでございます。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>地域コーディネーターというのは私たちも岐阜大学の視察で地域コーディネーターのことについて学ばせていただいたことがあるんですけど、熊本市の場合は、各学校というよりも、公民館レベルなのかなと思いますけど、どのくらい人数はおられるのでしょうか。</p>
<p>宮本義久 地域教育推進課長</p>	<p>この研修、昨年度の研修におきましては、それぞれ2回行ったんですけど、70名以上の方の参加がありました。ただ、現時点では、このスクールサポートボランティアというのを名簿登録というような形にはしておりませんで、じゃ、実際、何人おられるんですかというふうなところでは、ちょっとご回答が今の時点ではできないということになります。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>今のはスクールサポートボランティアの人数ですかね。</p>

宮本義久 地域教育推進 課長	はい。
澤栄美 委員	地域コーディネーターはどのくらいいらっしゃるんですかね。さっきの説明、私が聞き間違いでなければ、そのボランティアの人たちに学んでいただいて地域コーディネーターを増やしていくというふうに聞いたんですけど、今現在は地域コーディネーターは何人くらいおられるんですか。
宮本義久 地域教育推進 課長	地域コーディネーターというのは、今現在、うちの課のほうでモデル校を8校にお願いしておりまして、そのモデル校で活躍していただいている方ということで、今、地域コーディネーターという方がいらっしゃいます。それぞれ各学校で1人から、多いところでおよそ4人、たしか全部でおよそ15人、モデル校で地域コーディネーターが昨年度の時点をお願いしているという形になります。
澤栄美 委員	<p>ありがとうございます。以前も同じようなことを聞いたような記憶がよみがえってきて、申し訳ありませんでした、何回も。</p> <p>先ほど、会が始まる前に西山委員のほうから、こどもの幸福感の統計データが出て、熊本が非常に低いということで、これは日経新聞のほうの最後の記者さんのまとめ方というものもあると思うんですけど、その中で、やはり2位の山梨県はコミュニティスクールや地域学校協働活動を通じて社会教育を手厚く実施して、人が困っているときに進んで助けることも多いとか、そういった地域がしっかり活性化することでこどもの幸福度が上がるというようなまとめのほうに、そんなことを感じるような記事だったので、その辺の熊本の活動、以前もちょっとお聞きしましたが、そういったモデル校になっているところから、こどもたちが地域の中で自信を持って育っていくようなことができたらいいかなというふうな感想を持ちました。ありがとうございました。</p>
遠藤洋路 教育長	では、ほかの委員の方から何かありましたらお願いします。大丈夫ですか。西山委員、どうぞ。
西山忠男 委員	24ページに防犯カメラの質問があって、アンケートを取っている。この間から我々、そういう議論をしていましたけど、

萩本広智 教職員課長

教員の回答率が悪いというのが書いてありましたよね。それで、やっぱりこれはちょっと問題だと思うんですよね。長期休業が含まれているからじゃないかという回答ですけど、やはりこの問題に対する、これは性被害防止に関係して、防犯カメラ設置問題ということでアンケートを取っているんですけど、やっぱり教職員の回答率をもっと上げないと、正しい施策はできないですよね。ちょっとその辺、どうなっているのかなと思います、どなたか詳しい方がおられたら教えてください。

委員おっしゃるとおりだと思います。まさにこれ、教員も当事者そのものがございますので、しっかりそこは協力するように、私どものほうからもしっかり依頼をかけていきたいと思えます。

西山忠男 委員

要するに、教室に防犯カメラを設置するかどうかという判断もすることになるかもしれないんですよね。ですから、教員の先生が例えば、いや、そんなことはやめてくれと、それは教育に対する妨害になるとお考えになるのか、それとも、いや、設置してくださいと、こどもたちの教員に対する暴力があって、保護者が納得しないので、証拠能力がある防犯カメラが必要だとおっしゃるのか、その辺はとてもクリティカルなので、ぜひ多くの教員の方に回答していただきたいと思えます。よろしくをお願いします。

遠藤洋路 教育長

教員の回答率は50.1%ということで、それが低いんじゃないかということ、児童生徒が27.6%、保護者が24.8%、教職員が50.1%ですので、50.1%が低い、教員には80%ぐらい回答率があつてしかるべきなんじゃないかということであれば、そういう考え方なのかなと思いますけど。保護者とか児童生徒よりは高いけど、半分が高いか低いか、それはアンケートの性質にもよるのかもしれませんが、任意回答ですので、半分というのがどうなのかということでしょうね。評価の問題ではありますけど。

どうぞ、澤委員。

澤栄美 委員

今の話とは違つたんですけど、ああ、そうだった、ここに印つけていたはずだったというところで、AEDについての質問が29ページのところであつたんですけど、私、以前勤務して

	<p>いたとき、地域の方が倒れられてAEDを使ったことがあって、そのときに使ったパッドはもう使えないので、健康教育課のほうにそのパッドをお願いしますと言ったら、届くのにお大分時間がかかって、保健室の横のところにAEDが置いてあったんですけど、ピーって時々鳴っていたんですね。すごい時間がかかったので、その交換のパッドの予算づけというのは、そのときしてあったのかなと疑問を持ったんで、もちろん使う頻度ってそんなに多くはないと思うんですけど、途中でそういうふうに使って、換えが必要になったときの予算づけというのはどうなっているのかなというのをそのとき思ったので、今現状としてどうかなというのを教えていただけたらと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>健康教育課からお願いします。</p>
<p>草野陽介 健康教育課長</p>	<p>AEDについては各学校で定期的に動作確認等を行っています。パッドについても推奨期間を経過するものについては必要な予算を確保して必要な交換を行っています。もし途中で切れたというようなことがあれば、そこは予算を工面して対応していると、そういった状況でございます。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>定期的に換えることについてはそうなんですけど、途中でそういうふうに使って、もうなくなったというときは工面してできるようにはなっているということですかね。</p>
<p>草野陽介 健康教育課長</p>	<p>学校からそういった報告があれば、予算のほうはこちらで確保して、きちんと使えるような状態にしているということでございます。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>分かりました。ありがとうございます。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>じゃ、澤委員のご存じのケースは予算の確保に時間がかかったということなんですかね。そんなことはないと思いますけどね。健康教育課長、じゃ、使ってからどのぐらいで補充するみたいなそういうのはあるんですか。</p>
<p>草野陽介 健康教育課長</p>	<p>予算的にはそんなに何百万もかかるものではありませんので、学校から相談があれば、速やかに予算のほうは工面してできるかと思いますので、そんなに何か月もかかるとかそういう</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>ことはないかと思います。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>分かりました。 澤委員。</p> <p>私が経験したのは15年ぐらい前だと思うんで、恐らくまだAEDが学校に入り出した頃だったと思うんですね。だから、それからすると、実際、そのときは1か月以上かかったんですよ。だから、割と迅速に今はうまくいっているのかなと思って聞いてみたところです。ありがとうございました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。15年前はそうだったかもしれないけど、今はそんなことはないという課長の答弁でした。</p> <p>では、ほかにないようでしたら、本件は以上といたします。</p>
<p>・報告(2) 令和7年度熊本市学力調査の結果について</p>	
<p>《寺前研太郎 指導課長 報告》</p>	
<p>西山忠男 委員</p>	<p>2ページの中学校の調査結果を見てちょっと気になるのは、英語が少し低いですね、1年生と2年生。これ、どうしてかなというふうにはちょっと思うんですけど。これは全国の問題なので、直接、この結果とは関係ないかもしれませんが、ある記事で、新聞だったか、ウェブの記事だったか忘れちゃったけど、見たんですけど、要するに小学校の英語では話すことが中心で、中学校になってくると文法が入ってくるから、途端に、中学生になった途端に英語が嫌いになると、そういう生徒が増えていくと。中学校の先生から言わせると、小学校の英語の授業はやめてほしいと、最初から中学校できちんと教えたいという声があるんだそうです。それは全国の問題ですから、このうちが低いのは関係ないとは思いますが、熊本市の場合、英語教育に関してそういう問題意識があるのかどうか、その辺はどうなんでしょうかね。</p>
<p>水田貴光 教育センター 所長</p>	<p>昨年度も市議会の一般質問で英語教育に関してはご質問を受けまして、教育センターとしましては、小中学校の英語担当者、</p>

	<p>教科書に載っておりますCAN-DOリストの活用がちょっと明確ではなかったという点と小中接続期の学びのつながりというところに課題を感じております。今年度、そういうところから、新規事業で小中合同の英語の研修会を実施することにしたところです。またあわせてその研修会の中で、教科書も光村図書のものなんですけど、CAN-DOリストとかそういうふうに教科書の活用ガイドみたいなものもしっかり周知して、そういうところを補っていければなと考えているところです。</p>
西山忠男 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	<p>ほかにいかがですか。</p> <p>じゃ、私から1つ、最後のほうにあったScTN、8ページですかね、1回目と2回目、つまり年度の初めのほうと終わりのほうを比べたら上がっているということなんですけど、この4項目ある中で見ると、この本物の学びというのが低いですねという説明があったかと思いますが、この本物の学び以外の3つは言葉を読めば大体想像できるんですけど、本物の学びというのは言葉だけだと、どういうことを指しているのか分かりにくい部分があると思いますので、ちょっと本物の学びって何ですかというのをもう一回ちょっと説明していただいていいですか。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>スライドでいきますと、7ページに具体的な質問項目、内容が書いております。本物の学びの質問項目としては、生活のことや社会で話題になっていることを題材に学んでいるかどうかということと授業を進めるのは自分だと思いながら授業を受けているか、こういう項目が本物の学びの内容になります。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>先ほども少しありましたけど、授業を進めるのは自分だとか、主体性に関わる項目だということだったかと思いますが、やっぱり主体性に関わる項目が一番低いということで、その前の熊本市の学力調査でも、やっぱり主体的に学習に取り組む態度というのが全国に比べて低いということで、あまり改善していない状況があるということ、この辺の原因というのはどんなことなのか。タブレットを入れたりいろいろやっているにもかかわらず状況がよくなっていないということについては、どうやって改善していくのかということは、これはやはり教育委員会としてしっかり考えなきゃいけないと思うんですけど、その点、</p>

<p>水田貴光 教育センター 所長</p>	<p>教育センターはどう考えているのでしょうか。</p> <p>教育センターとしても、教育長おっしゃったとおり、主体的に学習に取り組む態度に関しましては、ICTをただ活用すればいい、先ほどの対話の場面も同じですけど、タブレットを使って話し合いをすればいいで終わっているという面は、授業づくり支援訪問等でも指導主事から報告を受けているところです。教科の本質に迫る、狙い、目標にしっかり到達するような授業といえ、まだまだ課題があると思っております。</p> <p>教育センターとしましては、現場の若手教員からも教科に関する学びをしっかりと深めたいという声も聞いておりますので、今年度、特に小学校の国語と算数に関しまして、教科の研修会のほうをちょっと増やしております。そういうところで、さらに主体的に学習に取り組む態度が繋がればというふうなところを考えているところです。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>ScTN質問紙に関しては、苦野先生が関わってつくっておられるので、私も最初にScTNの報告があったときにオンラインで参加していました。これには大きく2項目に書いてありますけど、具体的に言うと、もっとほかにどんな細かい質問はどのようなものがあるかということをお聞きしたいのと、それと前にもこの会でもおっしゃっていましたが、それを基にどんな授業改善をすればいいのかということまで出せるものだというふうにはたしか伺ったと思うんですけど、その中ではどういふふうになんか授業をしたらいいよというふうになっているかということまで、もし出ているんだとしたら、その内容をセンターのほうからでも、どちらからでも聞けたらいいかなと思いますけど、いかがですか。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>熊本市の具体的なデータだったらセンターのほうがいいかもしれないですけどね。熊本市の結果で、もう少し詳細を教えてくださいということですよ、この本物の学びのところ。指導課なのか、どちらか。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>項目がこの2項目で調べているわけじゃなくて、小さな項目があると思うので、その項目、全部じゃなくても、ちょっと紹介していただきたいということ、最終的にこのScTNを利用して、どういふ授業改善が必要ですよというところまで出ると</p>

寺前研太郎 指導課長

いうふうに以前、苫野委員からも聞いたことがあったと思うんで、そういう改善方法とかまで出してあるんだったら、そこをお尋ねできたらなと思いました。

質問項目については、先ほど本物の学びの2つの質問とそれ以外に、例えば授業では自分の興味や関心に基づいて自分なりに問いや課題を立てて学んでいるであるとか、例えば個別の学びでいくと、授業では学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学んでいる。例えば、協同の学びでいくと、授業では自分が必要なときに必要な仲間と協力しながら学んでいる、のような項目が質問項目として上がって、まだほかにもあるんですけど、そういう項目が上がっております。

活用というところですけど、昨年度、初めてScTNを使いまして、また熊本市の学力調査とあわせて、活用研修のようなものを実施しております。熊本市の学力調査に関してはそれぞれの学校の担当者が結果を見て、その学校の強み、あるいは弱み、それに対する対策というのを考えています。ScTNに関しては、それぞれの学校で、担任であれば自分のクラスのその結果を見て、学級経営や授業改善に生かしたり、それから例えば校内研修あたりで先生方が集まって、それぞれのクラスや学年、学校全体の傾向を見て、こういうところが弱いから、学校全体としてこういうふうに授業改善していこうというような学校もたくさんあると伺っています。

また、会社のほうからハンドブックみたいなものも出されていて、それぞれの学校に配られているんですけど、その中に、学校の結果を受けて、こういう結果だったからこういう取組をしましょうというようなシートもありますので、そういうものを使いながら学校全体として取り組んでいくような手だてにもなっているかなというふうに思っています。

遠藤洋路 教育長

今の澤委員の質問は、熊本市の具体的な結果の中身を教えてくださいということだったんだと思うんですね。だから、こういうことでこういうことで、ではなくて、具体的に何が問題でどう改善するのかという熊本市の結果はどうだったんですかという質問だと思うんで、その中身を教えてくださいませんか。

指導課長。

寺前研太郎 指導課長

すみません。認識が間違っておりました。熊本市全体のとい

	<p>うことでよろしいでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>はい。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>すみません。熊本市の全体は今、8ページのスライドに書いてあるこの数値しかちょっと今、把握できていないので、また調べて後ほどお返ししてよろしいでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>個別の学校の結果があるなら、その学校の傾向が全体としてどうなのかという共通している部分があるはずなんですよ。1個1個の学校の結果が出ているならば、その学校ごとの結果を見たら、熊本市全体としてどういうところが課題で、どういうところを改善していったらいい、どう改善していったらいいのかというのは当然、分かるわけですよ。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>そこは分かると思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>それを教えてほしいということですね。学校ごとの結果は見ているけど、市全体としてどうしたらいいかは考えていないというそういうことですか。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>いや、市としては、先ほど申し上げましたとおり、それぞれの、熊本市としてということですかね。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>学校ごとの結果を全部、総合的に考えたら、熊本市としてはどういう結果だったのかということをお教えしてくれということです。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>市全体としては、担当者会議を開いて、そこでどのように活用していけばいいかという周知はしていますが、すみません、ちょっとそのほかの細かいところは把握できていないので、この後ちょっと確認をしたいと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>つまり学校ごとの結果を当然、全部足し合わせたら、市の結果になるわけでしょう。だから熊本市としてどこが弱いのかというのは当然、指導課として把握しているはずですよ。それはどうなんですかという質問なんですけど。</p>

寺前研太郎 指導課長	すみません、何度も。ちょっと確認をさせてください。お時間をください。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 澤委員、どうぞ。
澤栄美 委員	8ページに示されているのは市全体の結果ですよ。各学校にはこういう指導が大事ですよというのは会社のほうから言っているというさっきご説明だったですよ。だから、学校ごとには、自分の学校で足りていない分はこんなふうなところに指導の仕方、力を入れていこうということは分かっているということです。だから、各学校ではそれを参考にして授業改善をされていくということはできているということです。よろしいですか。
寺前研太郎 指導課長	澤委員がおっしゃったとおりです。
水田貴光 教育センター 所長	私の経験で2年前に北部中学校でS c T Nを使ったときの思い出なんですけど、例えばS c T Nで縦軸で個別にしっかり学んでいる方、個人で学んでいる方、横軸でグループで学んでいる方、こどもたちがプロット点でどこの位置にいるかというのがS c T Nで表示しますので、校内研修で担任が自分のクラスを見てみて、ああ、この子は1人でこんなに一生懸命頑張っていたんだとか、個人ではあれだけど、みんなで協力してやっていたんだというようなところで、意外な結果でこどもたちの様子を見取っていました。そういうところでS c T Nの活用が担任に周知するということで、授業改善に進んでいくと思います。 また、昨年度からの免除校なしで授業づくり支援訪問を実施しています。校長のほうから学校の課題、これ学力検査であったり、このS c T Nの結果で、うちの学校は課題がこれだから、対話のところをしっかりと教育センターのほうで見て、授業者のほうに指導してくれというふうな申出がありますので、そういう視点で学校全体の授業改善に取組を進めております。すみません、追加で。
遠藤洋路 教育長	ちょっと私から1点、いいですか。 菅野委員、このS c T Nというのは学校ごとの結果は出るけど、市として、こういうところが課題だとか、こういうふう

	<p>改善したほうがいいということはないということなんです ね。</p>
苦野一徳 委員	<p>今、どうぞ活用いただいているのがちょっと私も全部把握 しているわけではないので、正確にお答えできるか分からない んですけど、もちろん市全体で把握することは可能です、デー タで。あと、先ほどおっしゃっていただいたように、一人一人 もプロットできるので、一人一人がどういう編成になったかと か、今どういった位置にいるのかとか、こういったこともプロ ットできるので、非常にきめ細やかな見方から市全体を総合的 に見るといっても、もちろん可能です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。そしたら、先ほどの指導課の話でしたら、学 校ごとの結果は出ているから、各学校でよろしくお願います と指導していますという話ではなくて、市全体の結果も出てい るはずなんだと思うんですけど、そこは把握されていないんで すか。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>スライドの8ページに出ているのが熊本市全体の結果という ことです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ですから、どこが課題でどう改善するかという市全体として の結果は出ていないということですか。それは個別の学校ごと にしか出ていないということなんですか。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>改善の方向ということでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>はい。</p>
寺前研太郎 指導課長	<p>そこは市全体としては今、先ほど申し上げたとおり、自己決 定の機会が少なかったりとか、あるいは学習内容が実生活とつ ながっていないというその辺が改善の方向ということでお話し したところです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>いや、ですから、そこをもう少し詳しく教えてくれというこ となんですよ。それは改善の方向ではなくて、それが課題だ ということですよ。それをどう改善するのかということは何 か書いていないんですか。</p>

寺前研太郎 指導課長

まず、先ほど申し上げました自己決定の機会というところで、やはり子どもたちが受け身になってしまうような授業がまだ見られるのかなというところで、やはり子どもたちと、あるいは先生方と一緒にいるんな面で子どもたちに考えさせて自分で決めていくと、そうすると先ほどの質問の項目も少しずつ変わってくるのかなというのは思いました。

あと、学習内容を実社会と関連してという部分で、やはり教科書にあるものだけではなくて、身近にある生活の中の課題であるとか、実物であるとか、そういうものを使いながら課題設定をして学習を進めていく、そういう授業を少しずつ広げていくと、先ほどのアンケート項目の改善にもつながるのかなというふうに考えております。

遠藤洋路 教育長

分かりました。それは指導課としての考えで、ScTNでそういうことが出ているわけじゃないという話ですね。

寺前研太郎 指導課長

ScTNの中にそういうふうにしなさいというのが出ているわけではなく、そういう改善の方法があるんじゃないかなということと考えたところです。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

澤委員、すみません、お待たせしました。

澤栄美 委員

私がお尋ねしたかったことは、全体で結果が出ているので、それをどういうふうに活用するのかなというところで熊本市全体がとか、学校がとか、そういうところまで私はちょっと考えていなくて、でも各学校でそれが分かっていると、改善がなされていくよねと、個別の学校ごとに、そんなふうに思ったんで、各学校がそれが分かっているということは私は価値があるかなと、その上で全体、熊本市の方向としてどうしていくかということを考えていただけるならば、それで全然私はいいいのかなと思います。

一番私が評価できるなと思うのは、今まで指導課のほうから、これまでの中で連絡があったのは算数の点数がどうだった、国語の点数がどうだったというところだけで子どもたちを判断できるのかなというのをとても思っていたので、大変な労力を使ってこういう点数とかを出されていると思うんですけど、やは

遠藤洋路 教育長

りScTNが入ったことで、非認知能力的な部分が一つの数値として評価できるようになっているというところで、それを活用して子どもたちの先ほどの話じゃありませんけど、幸福感も上げながら学校の役割というのを考えていけるというところがいいことだなと思って今回、この資料を見て思ったところです。

先生たちが、どうしたらいいのというところも、各学校ごとにちゃんとそれを取り入れて改善していかれるというところに期待をしたいなと思いました。ありがとうございます。

教育委員会として考えなきゃいけないことというのは、学校ごとの結果を学校に返して、はい、これを見てやってくださいねじゃなくて、熊本市全体として何が課題なのかということをやっぱり把握しなきゃいけないし、それをどう改善するのかということを考えるのが指導課の仕事なんですよ。例えば学校ごとの結果しかなかったとしても、じゃ、どういうところに課題がある学校が多いのかとか、あるいはどういうふうに改善していくのが市全体としていいのかということはやっぱりそれは教育委員会の仕事ですよ。だから、子どもにテストを返すみたいに、はい、これで返してよろしくねというのであれば、別に教育委員会は要らない。各学校がScTNをやればいいだけの話なんで、そこがちょっと足りていないんじゃないかというふうに思ったので、今、何度も聞いたんですよ。

澤栄美 委員

そこは私もそうなんだなって思うところで、じゃ、それを具体的に各学校に活用できるようにということ、教育委員会のほうで全体を俯瞰して見たところで、その後に私はこうするといいいよなってさっきから思っていたのは、そういう結果を受けて、こんなふうな学びをさせたら、こういうふうになりましたというのを共有できるような仕組みがあると、全体に広がるよねというふうに思ったので、そういうふうに今後、活用していただくといいのかなというのをちょっと付け加えて。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。まさにおっしゃるとおりだと思います。

寺前研太郎 指導課長

貴重なご意見ありがとうございます。今、指導課として、市全体でこの結果を受けて授業改善につなげるために今考えているのが、昨年度の結果を基に、成績が上がった学校とか、ある

いは上がった学級とか学年とかというものをちょっと分析をして、その学校、あるいはそれぞれの中学校であれば教科で、いい方向に変わっていった学校に訪問をして、どういう授業の工夫をしているのかとか、そういうのを聞き取りをして、いわゆる実践事例集みたいなものを作成をして市全体には配りたいなということで今検討しています。特に先ほど英語のことも話題になりましたが、例えば中学校の英語ですごく伸びてきている先生の授業のいいところとか、どんな取組をしているかというのを整理して発信していきたいなとは思っております。

遠藤洋路 教育長

ぜひよろしくをお願いします。

苦野一徳 委員

S c T N質問紙の活用法として、ぜひといいですか、一番やっぱりいいのは、分析会といいですか、その結果をみんなで対話して、じゃ、こういうことができるかもねということをやったり話し合う、これが一番いい使い方なんですよね。例えば見たときに、先ほどあった授業では授業を進めるのは先生ではなくて自分だと思いながら学んでいる、結構衝撃的な質問項目なんですよね。ここがすごく例えば低かったら、じゃ、どうしたら子どもたちがそういうふうに思えるような授業ができるかなというのを対話するんですよね。今おっしゃったグッドプラクティスの共有もとても大事なんですけど、意外にその方法が下りてきただけだと、あまり自分事にならないということがあったりしますよね。それを自分たちで対話しながら、どうやっていけばいいのかなというのを一緒に考え合う、これがやっぱり一番効いてくる使い方かなと思います。

ここを出している質問項目、熊本市はベーシック版を使っていただいていたんではなかったかね。ライト版とベーシック版とアドバンス版があるんですけど、ベーシックもそんなに多くないので、質問項目、先生方にとって、ああ、なるほど、こういう授業って確かに目指すといいよねという質問項目自体がそうなっているんですよね。先ほどもおっしゃっていただいた「授業では、ふだんの生活のことや、社会で問題・話題になっていることを材料に学んでいる」、これ5件法で答えていただいたりとか、あるいは「授業では、学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学んでいる」とか、こういう質問項目自体が、ああ、こういうのを目指していけばいいのかというものになっているので、その結果を見ながら、ああ、ちょっとここ弱

いなとか、あと、この子はこういうところがよくできているんだなとかそういうを見ながら、やっぱり対話をするというのが大事なんですよね。なので、これやっぱり校内研とかでそういう分析対話とか、これを活用した授業を一緒に考え合う機会とかが充実すると、全然変わってくるかなというふうに思いますので、全ての学校でそういうことをやってくださいねというのはなかなか難しいと思うんですけど、そういったご提案をしていただいて、確実にそれで変わっていくと思いますので、そういったことを示していくというのは教育委員会としてありなのかなという気がしております。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。今の苫野委員のご助言もぜひ生かしていただいて、各学校、取組を進めていきましょう。

やっぱり熊本市として、これまでいろいろICTを含めてやってきましたし、膨大なお金も使ってきて、各学校でもいろいろやっているわけですけど、にもかかわらず、あんまり結果が伴っていないというのが今の状況だと思うんですよね。それは決してテストの点数が上がっていないということだけではなくて、私たちが本来、一番目指していたはずの主体的に学習に取り組む態度とか主体性ということも全国よりも低いままであるという状態なので、正直、何も成果が出ていないじゃないかと言われたら、そのとおりの状況なんですよ。なので、すごく一生懸命、長時間勉強しているんだけど全然成績が上がっていないですねみたいな人と同じ状態で、何かやり方がまずいのか、あるいは何か欠けている。逆に、そのやり方さえ分かれば、ちゃんとこの主体性も高まるだろうし、そうなったら、ほかのところも上がってくるんじゃないかと思うんですよね。何かそこがやや、一番大事な部分が欠けたままの状態なので、今のまんま努力しても、多分、結果は伴わないんですよ。何かやり方を変えないと。ですから、そこを何かぜひ指導課や教育センターも探っていただいて、そのために苫野委員がおっしゃったようなみんなで議論することも大事でしょうし、実際うまくやっているところ、成果が出ているところがあったらそこに見に行き取材して、具体的にどうしたらいいかということをやっぴり見るということも大事でしょうし、そうしながら次のこの次の報告のときにはこれよりいい結果が聞けるように、みんなで一生懸命これからやっていかないといけないのかなと思ってますので、ぜひ頑張ってください。

西山忠男 委員	<p>私はこのS c T Nの質問項目の本物の学び、これが教育長も分からないとおっしゃったけど、私も分からないんですよ。分からない点が2つあります。本物の学びというこの定義は何なんだという、主体的な学びと読み替えればいいんですか。まずそれをお尋ねしたい。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分からないというよりも、これっていわゆるオーセンティックな学びというのを日本語にただけだと思うんですけど、一般的には聞いたら分からないですよ。だから、そこは分かるように説明してくださいというふうにさっき注文したつもりだったんですけど、私分からないというよりも、この字を見たただけだと確かに分かんないよねというふうに思いますよね。</p>
西山忠男 委員	<p>いや、私の意見は、探究の学びだって個別の学びだって協同の学びだって、本物の学びじゃないかという意味ですよ。そうじゃなくて本物の学びと分けて書いてある意味が理解できないということなんですけど、これ主体的な学び.....</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。そこはもう苫野委員がつくられていますので、まさにご説明いただける部分だと思います。</p>
苫野一徳 委員	<p>じゃ、すみません。これ実は結構高度な教育学の概念構成でつくってありまして、まず主体的・対話的で深い学びというものをどういう構成概念にするかというところからまずつくるんですね。それが本物の学び、探究の学び、個別の学び、協同の学び、あとプラス民主的な学校生活というこういう構成概念をつくっているんですけど、これ一応いくつか理由があって、私はずっと学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合というのを言っているんですけど、要するに、人それぞれ自分なりのペースで自分に合った学び方とか、自分のレベルとか、いつどこで誰とどんなふうに学び合うのがいいかというのは違うので、ここにまずフォーカスすると、個別の学びというところの構成概念ができて、これをどうやったら観測できるかという観測変数をつくるんですね。</p> <p>それと同じように、次、協同の学びですね。これも個別の学びというのは孤立化するわけじゃなくて、必ず緩やかな協同に支えられている必要があるんで、協同がどれくらいちゃんとそ</p>

の学びを支えているかということ構成概念としてやって、これを観測変数として、じゃ、こういうふうになっていたら協同の学びがうまくいっていると言えるよねというふうにして、観測変数を今度、質問項目まで落とし込むんですけど。

それから、探究というの、自分で、与えられた、言われたことを言われたとおりにやるんじゃなくて、自分なりの問いを立てて、自分なりの仕方、自分なりの答えにたどり着くというそういう探究がカリキュラムの中核になっているといいよねということで、基本はこの個別と協同と探究というので組むんですけど、これをさらに貫くような形で、どれだけ自分たちの学びが状況に埋め込まれているか、本物の学びというのは2つの観測変数を出して、状況に埋め込まれた学習と自己決定に貫かれた学習、これやっぱり一番そこないと、学びを本物にしていくことはできない、オーセンティックなものにしていくことはできないということで、個別、協同、探究というので1つ区切ってもいいんですけど、これをさらにそこで支えるような概念として、状況に埋め込まれた学習と自己決定に貫かれた学習という観測変数を置いて、すみません、ちょっとこれ表とかを見ながらやらないと分かりにくいかも。ScTNのホームページにいていただくと、この辺、全部、解説を実はしているんですけど。

本物の学びを状況に埋め込まれた学習と自己決定に貫かれた学習ということで観測変数を出して、これを質問項目にすると、状況に埋め込まれた学習が、「授業では、ふだんの生活のことや、社会で問題・話題になっていることを材料に学んでいる」という質問項目になるんですね。自己決定に貫かれた学びというのは、「授業では、授業を進めるのは、先生ではなくて、自分だと思いつながりながら学んでいる」かどうかという質問項目になるんですけど、そういう学習、よりよい学びになるような構成概念は何で、それはどういうふうになって測定可能になって、それを質問項目に落とし込むとどうなるかというふうには実は考えられたものになっているんですけど。

西山忠男 委員

教育学としてよく考えていらっしゃるの理解できますけど、自分が生徒の立場でこれを聞かれたときにどう思うかということですね。生活のことや社会で話題になっていることを材料に学んでいる。材料は教科書に書いてあることで、先生がくれるんじゃないかと思って、自分はバツにします。授業を進め

るのは自分だと思いながら学んでいる。授業を進めるのは先生じゃないか。だからバツにします。もしこれが授業に積極的に参加していますと書いてあったらマルにします。あるいは、授業に主体的に参加していますと書いてあったらマルにします。でも、授業を進めるのは自分だと思いながら学んでいる、これは絶対バツだよなと、僕はそうしますよね。だから、質問の仕方では答えが変わる。だから、本当に主体的な学びになっていないのかというのは、ひょっとしてそうじゃないかもしれませんがよ。この質問の仕方ですらういうふうに分類されているだけじゃないかという感じがして、私はこの質問項目は非常に分かりにくいという感じがするんですよね。もし、生活のことや社会で話題になっていることを材料に学んでいる、これが探究の学びのところに書いてあれば、それは分かります。分かりますけど、普通の教科の授業で、それは生徒が材料にできるようなことじゃないですから、自分が生徒だったら、これはバツにします、絶対に。

苦野一徳 委員

それはいくつかお答えしなければいけないことがあるんですけど、まず質問項目の作り方自体が、ここからは私の専門ではなくて、これをメインで開発した研究者の専門領域なんですけど、いわゆる測定理論で、これもしっかりとした理論に基づいて、こういった質問項目にしているんですね。子どもたちが別に自分がどこの項目に答えているかということを知る必要はなくて、これはあくまでもこの質問を見て、自分たちの、このScTNの使い方も、授業全体がそうになっているというときもあれば、使い方によっては、ある教科のある単元のときだけにこれを使うという場合もあったりして、いろんな使い方ができるんですけど。我々としては、あるいはこれからの学びの在り方として望ましいのは、これどの教科だろうが、どの単元だろうが、こういった要素がどれくらい含まれているかという、これを5件法でやってもらうんですね。だから1から5までやるので、マル・バツではなくて、大体自分は3ぐらいだなとか、自分はかなりできているなとか、こういうのを自分の感覚で見えていって、あとこれさっき読み解き替えが結構大事って言ったんですけど、先生がその感じを自分の感覚と合っているかどうかを確かめるというのも結構大事なんですね。実は読み解きも結構実は技術が必要なので、もし、ご要望があれば、ScTNの開発者なんか読み解きにちょっと伴走させていただいて、

西山忠男 委員

ちょっとコツをつかんでいただくと、ああ、こういうふうを読み解くと意義のあるデータとして活用できるなというやり方も見えてくると思います。例えば、地域によっても全然違うんですよ。どういう地域柄とか、どういう家庭環境とか、こういうのもちょっと変わってくるんです。そういったことも微妙にそういったことを考え合わせながら各学校で分析していくと、非常に今後の授業改善に意義のあるようなデータとして、これ使うことができるんですけど。

要するに言いたいのは、これはどの授業においても、授業では、授業を進めるのは、先生ではなくて、自分だと思いながら学んでいられているかということのを5件法で答えてもらう。実際の問題・話題になっていることを材料に学んでいる、これもどんな授業でもそれがどれくらいできているかということをはかっていただく、そういうことになっています。

すみません。しつこいようですが、授業を進めるのは自分だというのは私にはどうしても理解できない。だって、何十人もいるわけですよ。どうして自分1人で授業を進めているんですか。そういう質問をされたら非常に困惑するんですよ。

本物の学びというところにはもっと幾つも質問があるんでしょうけど、この2つだけ見たときに、これ一体何を見ようとしているのかというのが私には全く理解できないんですよ。これが出てきた数字が何を意味しているの、意味はあるのって私は思ってしまうんですよ。

苦野一徳 委員

例えば、前にこちらにも来ていただいた山吹小学校があったと思うんですけど、あんまりどこまで学校名を出していいかちょっと分からないんですけど、4.6とか4.7とかなんですよ、これ、全項目が。つまり、自分で学習計画を立てて、そして自分で他者と自発的に協同、これは内発的な協同という項目があるんですけど、内発的に協同しながら、つまり言われてやっているんじゃないんですね。はい、今、協同しなさいじゃなくて、自分が必要なときに必要な人の力を借りたり、自分も誰かの力になりながら学んでいる、こういったものが高止まり状態なんですね。こういった授業って可能で、むしろそういうのを目指していきましょうねという質問項目になっていまして。

西山忠男 委員

分かりました。今やっと理解できましたけど、それは授業の

	<p>形態によりますよね。だから、普通の授業をやっている限り、これはそんなに点は上がらないですよ、絶対に。紹介いただいたような例を思い出して、ああ、そうだな、そういう授業だったらこれは点数が高くなるわなと思いましたが、普通の授業では点は上がらないので、そんなに気にする必要はないんじゃないかという気がしました。</p>
苦野一徳 委員	<p>まさにおっしゃるとおりで、なので、そういった授業を目指していきましょうというメッセージがこの質問項目自体に込められているということになっています。</p>
西山忠男 委員	<p>分かりました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>そんなに気にしなくていいということではなくて、まさに教師主導の一斉授業から主体的・対話的で深い学びにしていきたいと思いますと言っているわけなんで、ここは大事な部分なので、気にはしなきゃいけないと思うんですけど、分かりにくいのは確かで、オーセンティックな学びと書いてもらったほうがまだ分かるかまでは言いませんけど、確かにこれをもった各学校の先生たちが意味が分かるのかなという観点で考えると、どうなのかという部分も確かにあるかなと思います。</p>
苦野一徳 委員	<p>すみません。一応これメインになって、表に出てくるのは質問項目なので、その背景にある構成概念とか観測変数とか、そういった理論的背景はそんなに考えなくても構わないんですよね。その質問項目を見て、ああ、自分の授業はどうなっているかなというのを見ていただいたらいいだけということにはなっております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。いかに当事者意識を持っているというか、自分のこととして実感を持って学んでいるかとか、そういう要素がここに書いてある中に入っているんだと思うんですけど、本物の学びと言われると、いや、そんなら、偽物の学びなのか、ほかのは、というふうに思っちゃうのはあるかもしれないので、ちょっと言葉の選び方は難しいなという気はしますけどね。でも、ここに書いてある個別の中身の要素はよく分かることだというふうには思います。</p>

<p>澤栄美 委員</p>	<p>いや、苫野先生が言われたので、だからこそ、そこを目指すというそういう質問紙なんだよねというのは私も思っていて、先ほどお願いしたように、だからどう改善したらこうなったということをいっぱい集めて、熊本市全体で上がっていくようにしたらいいのかなって。</p> <p>本物の学びという部分、確かに本物の学びってどんなことって思うと思うんですけど、これS c T N質問紙にこういう名前がついているということなんでしょう。それを熊本市で変えることはできないんじゃないかなというふうにちょっと思ったりもしましたけど。確かに本物って何って思うのは思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>熊本市で変えるというよりは、S c T Nのほうで考えてもらったほうがいいんじゃないのという話なのかなと思いますけど。全国の学校の先生方もこれを見て、ああ、なるほどって分かるならいいんですけど、そうじゃない場合もあるかもしれないし、何かすっと入る言い方があればいいような気はしますけど。</p>
<p>村田槇 委員</p>	<p>すみません。素人なので、的外れな質問だったら大変申し訳ないんですけど、この回答した子どもたち自身は結果とかを自分で後から確認をするということ是可以するんですかね。</p>
<p>寺前研太郎 指導課長</p>	<p>子どもたちというと、子どもにクラス全体の結果をとということでしょうか。個人ではなくてということでしょうか。</p>
<p>村田槇 委員</p>	<p>クラスで自分の回答が、クラス全体ではどこら辺だったとか、市全体の数字でもいいんですけど、そういうのが子どもたち自身には、結果として自分がどの辺りなのかというのが分かるのかなというふうに思ったので、ちょっとお尋ねします。</p>
<p>寺前研太郎 指導課長</p>	<p>そのお子さんが答えたのは自分で答えているので、数字としては分かると思うんですけど、それが学級の中のどの位置にあるかというのは、子どもさんには恐らく返していないと思います。担任の先生とか学校の先生方が学級全体とか個人のお子さんの状態を知るといふふうに活用していると思います。</p>
<p>村田槇 委員</p>	<p>ありがとうございます。そのクラスでの結果が、じゃ、学年で比べたらどうだったかとか、個人というよりはクラスの、自</p>

寺前研太郎 指導課長

分のクラスの結果が学年でどうだったか、あるいは市全体と比べたらどうだったのかというのを子どもたちが自分で結果を見て、自分たちのクラスでは、どこが少し足りていないとか、子どもたちにも一緒に考えてもらう機会があれば、少し自分たちの授業の関わり方とか、進め方というか、一緒に授業をつくっていくという形がどういうふうにしたら少し進展していくんだろうかというのを、ちょっと小学校の低学年のお子さんとかは難しいとは思いますが、そういう自分たちで子どもたちにも考えてもらう機会があったらいいのかなとちょっと思いました。

ありがとうございます。今、委員がおっしゃったこと、とても大切かなと思っています。個人の結果はみんなの前で出すことはできないと思うんですけど、学級全体の傾向、例えば先ほどスライドの8に出したように、このクラスはこんな、全体としてこういう傾向があるんだよ、だからどうしていこうかねというのを子どもと共有するのは非常に大切かなというふうには思いました。ありがとうございます。

苦野一徳 委員

一応、念のためなんですけど、比較して優劣を競うものでは当然ないので、それだけは注意しながらのデータ活用かなというふうには思います。さっき申し上げたとおり、これ、先生の力量だけによっているわけでもない。地域柄とか家庭とか、いろんなものが背景にありますので、これで先生を評価するというでもない。あくまでも、生徒の実態を理解して、よりよい授業改善につなげていくというためのものだというそういったデータの使い方というのは大事にしておく必要があるかなと思います。

村田槇 委員

すみません。今、私の意見を受けて言っていたので、もう一回手を挙げちゃったんですけど、もちろん優劣というつもりで言ったわけではなくて、少しずつでも今より、より改善していくために、自分たちのクラスの授業づくりがどうしたら、もっともっと向上するだろうという意識を上げていってもらうために、話す機会があれば、個人に関わる回答にも少しずつ変化が見られていくのかなと思ったので、そういうつもりで意見いたしました。

西山忠男 委員

今、ずっと苫野委員と議論をしていて感じたのが、教育学の先生の考えられる理想像と現場の先生方の実感との間に大きな乖離があるんじゃないかなという気がするんですよ。山吹小学校のような授業を熊本でやればいいという、そうかもしれないけど、一方で探究型の授業ばかりやっていたら、基礎的な知識が身につかないということも指摘されていますので、そのバランスが非常に難しいと私は思うんですよ。例えば、ちょっと上の話になりますが、宇宙物理学で世界的な業績を上げた林忠四郎先生という方がいらっしゃいますけど、その人の研究室では、学生に修士までは一切研究はさせない。とにかく勉強しろと。現代物理学の一線に出るためには、しっかり全分野、物理の全分野をしっかりと勉強しないと、とてもじゃないけど研究はできませんと言って、一切研究をさせなかった。博士課程になって初めて一定のレベルに達した学生にだけ研究を許したというそういうスタイルが今でもあちこちに残っているんですよ。それは大学の話ですけど、そういう意味で、要するに基礎的な知識をしっかりと身につけるといことも大事なんだと私自身もそう思います。ですから、そこと探究型の学びとの兼ね合い、そこをしっかりと考えないと、やはりいけないんじゃないかなと思っています。

それで、現場の先生方はどちらかという、やはり私が言ったような知識重視型の感覚でやっていらっしゃる先生が多いんじゃないかという気がしていて、それもあながち悪いと私は言えないと思うんです。その間の調整というのが今後の課題になってくるのかなと思いますけど、例えば数学の先生の榎木先生はどう思われますか。

榎木敏之 学校教育部長

知識のほうはある程度、知識がないと発想も生まれにくいし、必要だとは思いますが、どの程度の知識があればいいかという、多分求められる知識は、例えば小学校、中学校、高校と上がるに従ってより増えていくので、知識がしっかり土台ができてから話し合うというよりは、当然そちらも大事なんですけど、学び方を学んでいくということも大事で、こどもたちが義務教育の中でいっぱい学び方を失敗しながら、自分に合う学び方を見つけていって、将来、自分の足で自分で歩きながら学んでいくというような自立した学び手を育てるという意味では、どう学ぶかということをやっぱり考えながらやっていくことが必要ですので、あんまり極端な、土台をつくってから学ぶ、

遠藤洋路 教育長

研究者の場合はちょっと違うのかもしれませんが、いろんな研究を知識がないままやってみて発明したのがカラーテレビだったみたいな、既にできているものにたどり着いたみたいなのだったらちょっといけませんので、研究者だったら、やっぱり最先端の研究の最前線がどこまで進んでいるかというのを理解した上で新しい研究に入るといふそういう使命があるかもしれませんが、子どもたち、全ての子のそれぞれのこどものレベルの学びをつくっていくということであれば、やっぱり同時にやっていくしかないのかなとは思っています。

西山委員、今の熊本市の課題は、理想的な教育ができていないということじゃなくて、全国平均に達していないということなんで、そういう点ではやっぱり課題はあるんだと思うんですよね。なので、その議論、レベルの話ということなのかなと思います。

澤栄美 委員

私もすごく勉強しているわけじゃないんですけど、少なくとも今の学習指導要領で、知識をないがしろにしているということはないですよね。資質・能力は知識・技能、それから思考力、判断力、表現力、そして人間性の涵養というところで、やはり知識があつてこそその深い学びというところは大事にしてあるし、今の論点整理でもその辺は大事にしてあるので、決して知識、伝達型だけに偏らないような、よく苦野先生が言われる、明治時代から、先生が前に立って子どもたちに教えるというのが150年ぐらい変わっていないというような問題を改善していこうというのが今の学び方を学ぶという熊本市の方向性なので、そこは先生方が、自分たちがそういう授業をしてきたから自分たちが同じような教え方で教えるというその授業自体をやっぱり変えていく必要があるし、だからこそSCTNの本物の学びだったりすると思うので、やはり多くの先生方がそういう授業をしていると思うとさっきおっしゃったんですけど、そういう授業をしているから、そうじゃない授業にして、子どもたちが学び方を学んで、将来にわたって自分が教えてもらえることだけを求めるような人間じゃなくて、自分から学んでいくというそういう子どもを育てるところを私は熊本市は狙っているのではないかなというふうに思っています。

苦野一徳 委員

今、西山委員から非常に大事な論点を出していただきました

遠藤洋路 教育長

ので、この機会にできるだけ手短にお話をさせていただきたい  
なと思います。

5時間ぐらいしゃべりますか。

苦野一徳 委員

いや、本当に手短にいきたいと思うんですけど、まず、この  
S c T N質問紙に関して、もちろん、これで完成ではないので、  
この質問紙自体をこれからバージョンアップしていくというの  
はとても大事だということをお前提として申し上げた上に、実  
はこの質問紙をつくる背景に、さっきの私の個別化・協同化・  
プロジェクト化の融合という理論だけじゃなくて、私の考えだ  
けではなくて、様々な教育学の知見と、あと近年の脳神経科学  
や認知科学や高度遺伝学などの知見まで、実はかなり盛り込ん  
で丁寧につくってありまして、その理論背景やこれをつくる背  
景も全部ホームページで開示してありまして、おかしいよねと  
いうのがあったら、全部検証可能な形にして、修正可能なよう  
にして、これがまさに科学の基本ですよ。反証可能性を必ず  
開いて、いつも修正できるようにつくってありますので、ぜひ  
そういったことも専門家の方々にしていただきたいということ  
で全部開示をしております。

その中の一つに認知科学の、近年かなり隆盛を極めているん  
ですけど、その一つの基本的知見で、ある意味当たり前といえ  
ば当たり前なんですけど、知識というものは教えられ与えられ  
るものではなくて、ではなくてという言い方でいいのかなって  
ちょっと思うところはありますけど、ではなくて自らつくり出  
すものであるというテーゼがあるんですね。生きた知識と死ん  
だ知識という概念もあって、生きた知識というのは、要するに  
文脈で使えるということですね。必要なときに取り出して使え  
る。応用的に使える。死んだ知識というのは、多くの日本人が  
英語を使えないみたいなことと一緒に、文脈において使えない  
と。一方的に教えられ与えられた知識というのは、ほとんどが  
剥落するということが言われていて、剥落しない生きた知識に  
なるのは、まさにここの本物ってそういうことなんですね。状  
況に埋め込まれた学習で、本物の文脈の中で学んでいく、こう  
いったものが剥落しにくいというようなことが言われていて。  
なので、じゃ、そういった学びをできるだけなので、西山委員  
がおっしゃったような大学の場合とかだと、特にそもそものレ  
ディネスができているわけですね。関心がある、そもそも。そ

ういった最先端の宇宙物理学に関心があるんだったら、まず最初に徹底的に最先端の知見を詰め込んで、私も哲学はそうだったんですけど、とにかく全部詰め込んでから自分の研究をするというのは非常に合理的ですけど、そういったものが全くないレディネスが整っていないときに、いきなり詰め込まれると、どんどん剥落するというのが分かっているんで、いかに状況に埋め込まれた学習ができ、まさに本物の学びがあり、個別というのは自分のペースで学べるとか、ちゃんと人の力を借りられるとか、自分の関心にドライブされるとか、こういった状況を整えると、より学びというものがドライブがかかるよという学習理論が、認知科学に基づく学習理論が、学習科学がかなりそういった知見も出しているんで、実はこういったことも背景にあってこういったものがつくられていると。すみません、あまり短くなかったかもしれませんが。

西山忠男 委員

いや、だんだん分かってきましたけど、ちょっとここで私から紹介したいことがございます。それは協議会で話そうと思ったんですけど、こどもの幸福感ランキングというのがこの間、日経新聞に載っていたんですけど、これは全国学力・学習状況調査からウェルビーイングに関する9指標を分析してこどもの幸福感として点数化したということだそうです。9指標は、自分にはよいところがあると思いますか、友達関係に満足していますかといった内容で、九州・沖縄の8県では大分が最も高く59.3、これに長崎の57.6と続くんですが、熊本は38.9で全国で45位。何なんだ、これはとって非常に驚いたんですね。長崎県がなぜ点数が高いかということの説明に、長崎県は生徒主体の学校づくりや教職員の働き方改革を進める学校を指定して支援するイノベーションハイスクール実践事業を開始したと。授業や部活は実施せず登校する必要もない、こんな学校があるんだそうで、そんなことで探究学習に充てる時間が多くて幸福感が強いということらしいんですね。

だから、これ、後で回覧しますからちょっと見て、非常にショッキングなデータなので、見ていただきたいと思いますが、こういうことを考えると、確かに苦野委員が目指しておられる方向は正しいのかもしれないなという気持ちはありますけど、さっき言ったように、知識の獲得との兼ね合いをどうするのかなというのはやっぱり私は課題じゃないかなと思っています。

遠藤洋路 教育長

どんな時代でも、こどもがやる気になっている授業とか、自ら学ぼうとしている授業と、教え込まれている授業とどっちがよい授業ですかといったら、多分、やる気になっている授業であることは変わらないんだと思うんですよ。でも、そこができていないんですよ、今の熊本の現状は。だから問題なんだと思うんですよ。これでいっても、S c T Nの1個前のページで、全国平均より低いですねとなっているものは何かというと、「新しい問題を解くときに、これまでに習ったことをどうやって使えば解けそうか、考えるようにしている。」これは知識を詰め込んでいると低くなるというものではなくて、やっぱり今までの勉強中心だとしてもですよ、勉強というか詰め込み中心だとしても、これはできていないと困る内容じゃないですか。

西山忠男 委員

そうですね。

遠藤洋路 教育長

ですから、それもできていない。ですから、そこがやっぱり大きな問題で。これもあるし、全国学力調査で先ほど出てきたような、自らちゃんと考えて学ぼうとしているみたいな指標が押しなべて低いということなんで、何が問題なのか、知識を習得すればよいという部分ではないところにもやっぱり問題があるんだろうなって思うんです。

西山忠男 委員

そうですね。

遠藤洋路 教育長

はい。ですから、ここのところが逆にできるようになれば、ほかのところも改善していくんだと思うんですよ。それは西山委員がおっしゃったように、そもそもやる気になってその学部に入ってきている人なんだから、それは徹底的に勉強したっていいでしょうという状態に初めてなるんだと思うんですよ。やる気がない人に修士まで勉強だけしろって言ったって、それは絶対無理、それに近い状態に今、なっているということですよ。なので、それは改善の余地がある。こどもの主体性とか自発性とかやる気とか、そういう部分がちょっと欠けているのかなと、足りないのかなということなんじゃないかなと思うんですよ。なので、そこが各学校での取組でうまくいくということなんだというふうに思います。大体いいですか。

西山忠男 委員

はい。

遠藤洋路 教育長	では、少々長くなりましたけど、本件は以上といたしたいと思えます。
・報告(3)熊本市立学校教員採用選考試験の実施について	
《萩本広智 教職員課長 報告》	
西山忠男 委員	ちょっとよく理解していないんですけど、特別支援教育を統合したというのは、今まで特別支援教育で受験していた人は、一般のどこかの枠で応募するということになるということですね。
萩本広智 教職員課長	失礼しました。一般の枠で応募いただくことになります。
西山忠男 委員	その場合、小学校はいいとして、中学校の場合、問題は生じないんですか。一般の国語、社会とか、どこかの教科で受けることになりますよね。それ問題はないんですか。
萩本広智 教職員課長	基礎免許を持っていれば、特別支援教育のほうに採用、配置は可能ですので、特段その制約はないかと認識しております。
遠藤洋路 教育長	西山委員がご心配されているのはどんな点なんですか。
西山忠男 委員	要するに特別支援で教員になろうと思っていた人たちが教科のどこかを受けるということで、何らかの不利益が生じることはないのかという心配です。
萩本広智 教職員課長	もともと基礎免許としまして、いずれかの教科、免許をお持ちの方でございますので、その問題は生じないと考えております。
西山忠男 委員	分かりました。
清田晃子 委員	特別支援のほうの先生になりたかったけど、一般のほうの受験と一緒にしちゃって、一般のほうに配属になったりする方

萩本広智 教職員課長	<p>が出てくるということになると思うんですけど、それだったら教職受けないという方が出てくる可能性というのはないのかなとちょっと思いました。</p> <p>確かに教職で特支のほうを目指される方もいらっしゃると思いますので、むしろそういう方は積極的に評価していきたいと考えております。ですので、これに伴いまして、今回から、従来、特支免許をお持ちの方は加点が3点だったんですけど、これを6点と倍に拡充しております。さらに、面接において特支の教育に関して希望を確認いたしまして、そういった方の思いでありますとか、あるいは意欲を積極的に評価していきたいと考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これまでも特別支援の枠で受けるという方というのはあんまり多くないんです。なぜかという、本格的に特別支援教育をしたいのであれば、特別支援学校がたくさんある県のほうを受けるんですね。熊本市の特別支援の枠を受けるという方は、特別支援学校はあまり希望しないけど、通常の学級ではなくて特別支援学級がいいという、そういうことというのはあまり受験する方のニーズに合っていないんじゃないかとむしろ思っているんです。ですから、本格的に特別支援をキャリアを通じてやりたいということであれば、やっぱり県のほうを今までも受けていると思いますし、逆に通常学級も特別支援学級も、先ほどからありましたインクルーシブのようなこともやりたいという方がこれまでも熊本市を受けていただいていると思いますので、それならば一般の枠の中で加点をするというほうが、より現実にも合っているのかなということですよ。</p>
西山忠男 委員	<p>そうした場合、特別支援の先生が今非常に足りないという状況の中で、必要な人数はちゃんと確保できるのかなというのがちょっと心配なんですけど、その辺はどうでしょうか。</p>
萩本広智 教職員課長	<p>ですので、従来、特別支援の区分で設けたものを、今回、一般の枠で上積みしておりますので、その上積み分は特支の教員分ということでしっかり確保を予定しているところです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これまでも通常学級と特別支援学級の担任を行ったり来たりということもやっていたので、そこはより人事が柔軟にで</p>

きるようになるということだというふうに思います。  
よろしいですか。  
では、ほかにないようでしたら本件は以上といたします。

・報告(4)令和7年度児童生徒・教員のタブレット端末の活用状況に関する実態調査の結果報告について

《水田貴光 教育センター所長 報告》

澤栄美 委員

いくつか質問があるので、資料について教えてください。全部で4つ質問があります。

まず、グラフの読み方で、5ページにもあったんですけど、6ページの黄色い線が入っていますよね。これは中央値とか、そういうことなんですかね、そこの意味を教えてくださいというのが1つと、それからプログラミングのところ、30ページで、スフィロの使用のことが書いてありますけど、今、教育センターにスフィロって置いてあるんですよね。大体どのくらいの数、学校に貸し出すあれがあるのかなというのが1つです。

それから、33ページのグラフなんですけど、学校からの宿題や課題でどのような場面でタブレットを活用していますかというところで、右端のほうに教員がいますよね。これ教員自身がということですか、それとも教員が子どもたちにこういう使い方をさせているという数のグラフなのかというのを、ちょっと分からなかったの。

それから最後ですけど、41ページで、端末への意識で、端末が導入されて感じる児童生徒の変化というところの2番目の項目で、学びの質低下への懸念というのがありますけど、これは質問するときこの文言で質問されたんですかね。この懸念というのが、学びの質の低下ということのほうかな、懸念じゃなくて。学びの質の低下というのはどういう状況を想定して皆さんが答えられたのかなというのを知りたいなと思いましたので、一応4つですけどお願いします。

水田貴光 教育センター  
所長

まず、グラフの黄色は中央値になります。  
続きまして、プログラミングのスフィロボルトは、19個、

	<p>15セットございます。貸出しのほうは、すみません、ちょっと調べて、学校への貸出し状況のほうはまた改めてご報告をさせていただきます。</p> <p>その次に、33ページの教員ですね。学校からの宿題や課題の項目の部分になります。</p>
澤栄美 委員	<p>例えばドリルパークの学習とか、先生がするのかなとちょっと思ったりもしたので、こどもに使わせるようにしているというこの質問なのか、そこを知りたいなと思いました。</p>
水田貴光 教育センター 所長	<p>失礼します。これは教員がどのようなことをさせているかというものです。一緒に行っていますので、すみません。教員が宿題をしているのではないということでもよろしく願います。</p> <p>4つ目が、41ページが、これが自由記述の困ったことですので、自由記述の大まかな内容を項目立てたものになります。学びの質の低下への懸念というところは、知識習得とかそういうのにちょっとタブレット端末を使う、多分書かないとか、暗記の面とか、そういう点での懸念というふうに捉えております。</p>
澤栄美 委員	<p>ありがとうございました。私、スフィロのことを聞いたのは、大人がしても楽しかったので、こどもたち、やっぱりああいうのを使ってプログラミング的思考というのを取得できないのかなと思ったのと、一番やっぱり思ったのは、学びの質の低下の、先ほどの議論にもちょっと関わってくると思うんですけど、ICTを活用することでそういうふうなことを先生たちが感じておられるというのはどうしてかなという、その具体的な部分を知りたいというのがあったので、またいつか機会があったら、どういうことを学びの質の成果というふうに捉えられているのか。ICTがあるから学びの質の低下なのか、先生方の授業のやり方がそれに合っていないのか、いろいろあると思うので、そのところを知りたいなと思いましたので、いつか教えていただけたらと思います。</p>
水田貴光 教育センター 所長	<p>指導主事からの報告では、授業を参観しておりまして、対話の場面だったり言語活動の場面だったりはまだ不足しているというのが全ての教科の見解です。また、ICT端末を効果的に使っているか。ただ話合いでも入力させて終わったりとか、し</p>

	<p>っかり主軸を押さえる場面だったりとか、そういうところにちょっと課題があるのではないかというふうな報告を受けておりますので、先ほどの授業改善にもつながりますが、その授業の狙いが何なのか、目的に到達しているのかというところをしっかりと授業者が振り返るところは、いろんな研修や訪問等できっと指導していかなくちゃならないというふうに認識しております。</p>
澤栄美 委員	<p>何か捉えようによっては、ICTを入れたことで学びの質が低下したというふうに捉えられるようなイメージがあったんですけど、今のお答えでいうとICTを十分に活用できていないというほうの意味というふうに捉えていいですか。</p>
水田貴光 教育センター 所長	<p>教員自体も授業でしっかり学びに効果的であるかというのは、8割以上の効果的な回答をしておりますので、それは一旦、使い方であったりとか、あとは繰り返しになりますけど目的に応じたものになっているかというところが課題と捉えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今の点は両方あると思っていて、タブレットやICTを入れたから学力が下がったんだという見方もあると思うんですね。そういう見方も含めてネガティブな影響があったという意見がどのくらいあるかを知りたかったのでこのアンケートをしたんですよ。ですから、本来いいものなんだけどちゃんと使えていないということではなくて、むしろICT悪玉論みたいな意見がどのくらいあるんだろうなということを知りたかったんですよ。</p>
澤栄美 委員	<p>例えばこれを議員さんとか見たときに、前使っていなかったときのほうがよかったならお金をたくさん入れて使う必要ないんじゃないかみたいなことになるのでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>そうそう、まさにそういう意見がどのくらいあるかを知りたかったのでこのアンケートを取ったということです。</p>
澤栄美 委員	<p>ということは、さっき教育長がおっしゃったとおり、やっぱり前の授業のほうが、ICTがなかったほうがよかったんだという意見も結構あったということなんですかね。</p>

遠藤洋路 教育長

この結果をどう解釈するかということですが、この結果を見る限り授業改善に寄与しているという答えが80%だったり90%だったりするので、タブレット端末を入れたほうが授業がよくなったという答えが圧倒的だったということなんじゃないかと思います。

澤栄美 委員

分かりました。やっぱり議員さんたちからすると、数値でいろいろ判断したりとか、行政の方もそうだと思うんですけど、そのときに何か今やっていることを否定するような方向になると、もちろん無駄遣いしているというようなことときは、やっぱりそれは改善しなければいけないと思うんですけど、今やっていることの効果というのがマイナスの意見のほうで打ち消されてしまうとちょっと残念だなという気がしたので、そこだけどうかというふうに聞きたいと思いました。ありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

これだけのお金を使ってやっていますから、メリットがあってもデメリットのほうが大きいのであれば、それは潔くやめるということも一つの方法だと思うんですよね。そういう選択肢も含めて、やっぱり私たちは、常に自分たちがやっていることが正しいという前提ではなくて、正しいのか、正しくないのか、どっちなんだろうということはやはり視野に入れて判断しなきゃいけないと思うんですよ。そうでなければタブレットなんか要らないだろうという意見に対しても説明ができないと思うんですよね。そんなのいいに決まっているじゃないですかみたいなことだったら話がかみ合わないわけじゃないですか。

例えば、教員でも子どもでも、いや、結局タブレットって、何か今あるけど、ないほうがよかったねとみんな思っているんだったら、私はむしろすっぱりやめるべきだと思っております。で、聞いてみたら、ここにあるように圧倒的多数が、いやあ、タブレット、めっちゃよくなっていますよ、絶対要りますと言うわけですよ。だったら何でさっきの結果なんだよというところなんですよ。だったら何で主体性も学力も上がっていないんだと。そこが一番大きな問題なんですよ。だからそこを、むしろそっちが先にあったわけですよ。これだけやっているのに主体性も高まっていない、学力も高まっていない。もしかしてこれ役に立っていないんじゃないというか、みんな実は何か嫌

西山忠男 委員

がってんじゃないと思って聞いてみたら、いやいや、めっちゃ必要ですよというわけですよ。だからそこは、じゃ、もうちょっと何か使い方があるんじゃないかというのが、ここから考えなきゃいけないところだと思うんですよね。それが分かったということで、非常にいいアンケートだったんじゃないのかなというふうに思いますけど。

今の教育長のご意見、全く賛成です。私は、今のICT時代にタブレットを使わないというのはもう全く論外だと思っていて、タブレットを導入したことで、こういうのに触れる機会のない貧しい家庭のこどもでもこういうICT教育に触れることができた、それは素晴らしいことだと思います。今どきスマホを扱えなかったら電車にも乗れない、飛行機にも乗れないみたいな時代になってきているわけですから、そういう意味で非常によかったと思っています。実際、授業に役立っているという意見が大半なので、それは全く問題ない。問題は、おっしゃったようにどう使うかというところで、その使い方がまだ十分うまくいっていないんだと私は思うんですよね。これはだから教育センターあたりでしっかり考えていただいて研修等で広めて、よい使い方、効果的な使い方というのをやっぱり広めていく必要があるんじゃないかなと思います。

別の質問いいですか。

西山忠男 委員

45ページなんですけど、生成AIの利用についてです。現在、教員の約40%が利用しているという結果が出ています。ただ、60%は利用していないんですよね。多分これから使われるようになると思うんですけど、生成AIは利用の仕方によっては授業の準備とか校務に非常に役に立つものですから、ぜひ広めてもらいたいと思うんですけど、やっぱり今日のお話にあったようにいろいろ問題もありますから、その辺はしっかり研修していかなくちゃいけないと思うんですね。

福岡市では、業者に委託して教員の授業準備のためのAIの利用法とかいう研修を全教員に実施しているという情報があります。これ、いつかお話ししたと思うんです。ですから、うちはそこまでお金かけられないかもしれないけど、やはりセンターでしっかり研究していただいて、どういう利用の仕方、効果的な利用の仕方があるかというのを先生たちに伝えていただきたいというふうに思います。

水田貴光 教育センター  
所長

生成AIの校務利用に関しましては、昨年度よりも少しばかり活用数は上がっているなというふうな認識はあります。また、使用に当たりましては、市のガイドラインをしっかりと確認した上で、機密性の高い個人情報には載せないなど、決まりはしっかりと守るよということを周知して使うようにしております。あと置かれている教育利用といいますか、こどもたちの利用につきましても、昨年度から準備を進めて、現行、実践でどうしようかということで協議を進めているところですので、またいろんなことで報告させていただきます。ありがとうございます。

遠藤洋路 教育長

1点、最初の澤委員の質問で、黄色い線が中央値だという回答だったんですけど、そうではないのかなと思って、例えば、分かりやすいので言うと25ページなんかを見ると、この黄色い線のところよりも左側と右側で色も分かっているし、クラスの50%以上にいい影響があったか、あるいは50%以下だったかという、その50%、多分60と30の間だから半分のところは線が引いてあって、これより左と右で肯定的な回答だったか否定的な回答だったかというのを分けるラインとしてこの黄色いラインが引いてあるように思うんですね。本来そうだと思うんですけど、例えばどのぐらい時間使っていますかとかも、何かちょっと使い過ぎじゃないみたいな時間と、ここまでだったらいいよねみたいなところに多分ラインが引いてあるんですが、6ページとかは、多分、何かちょっと線がずれているんだと思うんですね。場所がね。このピタッとそろっている暖色系と寒色系の真ん中のところに本来黄色いラインが引いてあるんですよ。「そう思う」とか「とてもそう思う」というポジティブな回答と、「あまりそう思わない」「そう思わない」というネガティブの回答の真ん中にほかのページであれば線が引いてあるので、多分この線の場所がずれているんですよ、このページはね。

それと、そう考えたとき、この黄色い矢印は何なんだろうなというのがちょっとよく分かっていないんです。ほかのページにもたまに出てくるんですけど、この黄色い矢印がね。25ページとかにも黄色い矢印が書いてあるんですけど、この矢印は何か、別に要らないんじゃないのというか、別にあってもいいけど、いい回答がこっちですよと示しているのか、ここが黄色いラインですよと示そうと思ったけどずれているのか、ちょっ

水田貴光 教育センター  
所長

とよく分からないので、ちょっとそこは資料を最初に作った人の意図とPDFにしたときにずれたんだと思うので、ちょっと確認してみてください。

教育長、申し訳ありませんでした。教育長のおっしゃるとおりです。ページによってちょっと黄色のラインに意味合いが違うようですので、申し訳ありませんでした。

遠藤洋路 教育長

それはそれとして、何かほかにありますか。

澤栄美 委員

まず感想なんですけど、25ページにタブレット端末があって良かったことを教えてくださいということで、小学校教員、中学校教員それぞれありますけど、楽しみながらそうだと思うんですけど、特に小学校の2位と中学校の3位で、画像、動画、音声などを活用することで、学習内容がよくわかるというのが上位に上がっていますよね。これは、やはり今まで、特に特別支援学級とかそういったところではデジターとか、いろんな学習障害がある子どもたちへの手厚いといいますか、そういったこういう端末を使うことで学習効率といいますか理解力が高まったというところがあると思うんですけど、通常学級にいる子どもたちの中でも、やはり画像を見たり動画を見たりすることで非常に理解できるということも子どもたちもいっぱいいるだろうと思いますので、ここが上位に上がってきたというのはそういう背景もあるかなと思って、さっきの学力調査のこともですけど、あくまで平均でいろんなものを出していきますよね。そういう、今度の多様性の包摂ということにも関わってくると思うんですけど、いろんな子どもがいろいろな学び方が必要なんだというところに、やはりこの端末が役立っているなというところを感想として持ったところです。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

では、ほかになければ本件は以上といたします。

【非公開の審議】

日程第3 議事

・議第25号 熊本市特別支援学校等教科用図書選定委員会委員の委嘱等について

《竹内賢二 総合支援課特別支援教育担当課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

・議第26号 歳入歳出予算のうち教育に関する事務に係る部分に対する意見について

《吉里麻紀 教育政策課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

遠藤洋路 教育長

ほかにご発言がありましたらお願いします。

水田貴光 教育センター  
所長

先ほど、澤委員からのスフィロボルトのことでちょっとご質問を受けまして、調べて分かりましたので、貸出し数が昨年度98回で、学校数は45校貸出しをしております。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。

澤栄美 委員

はい。

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

以上で、本日の会議日程は全て終了いたしました。ほかにご発言がなければ、以上で令和8年4月定例教育委員会会議を閉会いたします。お疲れさまでした。